

領域「表現」と小学校音楽科をつなぐ 和楽器を用いた活動の試み

岡 林 典 子

(児童学科教授)

佐 野 仁 美

(京都橘大学)

坂 井 康 子

(甲南女子大学)

辻 誠

(甲南女子大学)

深 澤 素 子

(京都幼稚園主事)

山 崎 菜 央

(附属小学校教諭)

はじめに

音楽教育、美術教育、教育現場に所属する筆者らは、これまで子どもたちの主体的な表現を生み出す保育・教育の理論と実践を模索してきた。幼稚園教育要領の領域「表現」の内容に改定前も改定後も示されている「イメージを豊かにする」ことがどのような環境や方法で実現できるのかを考える上で、次節で示すように筆者らは、子どものことばの発達や本来的な感覚、生活環境をもとに「子どもの素地はどうあるべきか」について検討してきた。子ども自身を知る研究において明らかにしたエビデンスをもとに、保育・教育の表現活動について協議し、協議をもとに教育現場で実践を重ね提案をおこなってきた。

こうして研究を重ねる中、2018年に幼稚園教育要領が改訂された。領域「環境」では「我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」「伝統的な行事」「わらべうた」「伝統的な遊び」など、また領域「ことば」では「生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること」「絵本や物語に親しんだり、ことば遊びなどをしたり…」という文言が加えられた。これらは後述するように、筆者らの研究に取り上げてきた事々であることから、筆者らは正に機が熟したと感じている。しかし新幼稚園教育要領の領域「表現」では、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付く…」と「自然」への注目はみられるが、「表現」のうち音楽に関連して言えば、「音楽に親しみ、歌を歌った

り、『簡単なりズム楽器』を使ったり」とあるのみで、子どもの生涯の土台となるべき幼児期にどのような表現を大切にすべきであるか、表現自体の「基」となるものは何なのかは示されていない。現状の幼児教育では「簡単なりズム楽器」としてカスタネット、トライアングル、タンバリンなどが主に取り上げられている。子どもにとってトライアングルやカスタネットの音は表現の「基」あるいは「素地」として最適なものかどうか議論されていない。小学校の学習指導要領に、取り扱う楽器として「和楽器」が小学校3、4年へと拡大されはしたが、子どもが生まれてから10年間の音環境については議論されているとは言えないのではないかと筆者らは、子どもたちの乳幼児期は表現力の素地をしっかりと育む時期として捉え、子どもたちが素地の無い根無し草にならないようにしなければならぬと考えている。

これらの観点から、本稿前半では、幼児が「和楽器」の音を聴いたイメージを絵にする活動の実践例を紹介する。音から絵を描く試みは子どもにとってどのような体験であったか分析し考察する。この実践は、新幼稚園教育要領に加えられた「他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし…」という点を考慮し、「共感」を重視しながらおこなった。

本稿後半では、新幼稚園教育要領の領域「ことば」に加えられた「言葉の響きやリズム…に触れ」を小学生においても継続して必要なことと捉え「音をオノマトペで表現する」ことを試み、これを「協同、協働」へと発展させた。これは、小学校学習指導要領「音楽」に加えられ

た「他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを考えたりしていく学習の充実」を重視して展開したものである。

1. 研究の背景—本研究への経緯と先行研究

これまでに筆者らは、校種は異なるが共に音楽教育と表現教育に携わる者として、幼稚園と小学校をつなぐ音楽活動の可能性について実践に基づき研究を重ねてきた（岡林・山崎ほか2014、岡林・難波・佐野・坂井ほか2015、難波・岡林・深澤ほか2015、佐野・岡林・坂井2016、岡林・難波・深澤ほか2016、岡林・難波・山崎ほか2017、岡林・佐野・坂井・山崎・深澤ほか2018）。これらの研究では、絵本やわらべうた、遊び歌を用いて実践を行い、「かけ声」「唱えことば」「オノマトペ」などを子どもたちの音声・音楽表現活動として捉えてきた。そして、それらを子どもたちの感性の「素地」として定着させたいという考えに基づき、検討を重ねた。その結果、表現活動において総合的な活動の必要性を見出し、音楽表現や造形表現、身体表現の結びつきを重視した保育・教育プログラムの開発を進めてきた。

一方、教員養成段階における資質・能力の育成や、指導教材の開発の必要性を感じ、教員養成課程の学生が、発達の連続性を見据えた指導者として高い資質と能力、表現力を身につけられるように、音楽表現、造形表現、身体表現の結びつきを重視したプログラム開発も行ってきた（山野・岡林・ガハブカ2010、岡林・ガハブカ・山野2012、山野・岡林・水戸部2018）。

近年の教員養成における表現力の向上と、音楽表現や造形表現、身体表現の結びつきに関わる先行研究としては、古市久子・矢内淑子・新實広記らによる一連の研究が挙げられる。古市らの研究は、音楽、造形、身体表現、言葉の各教科に共通する核になるものとして「共感的要素」を置き、それを基礎にして演奏力、造形力、演技力、読み聞かせ力など、各教科の技術及び表現力を効果的に伸ばそうとする試みである。

古市らによる1つ目の研究（2015）は、音楽

表現、造形表現、身体表現、言語表現、総合的な表現における保育実践教科書の分析を行った。さらに、教科書の内容、先行研究や、担当教員からのアンケートの結果から、「身体的感覚を取り戻すこと」「授業クラスの関係性を使うこと」「模倣を活用すること」「イメージを共有すること」「繰り返し」を共感的要素として挙げて考察している。

2つ目の研究（古市ほか2016）は、それらの共感的感覚のキーワードを意識して、保育士・教員養成課程の授業を行ったものである。音楽表現（身体表現）において《おはようクレヨン》を教材に用いた結果、難しい曲であるにもかかわらず、技術向上に役立つ一定の方向性が認められ、学生の関心が高まったことが窺えた。

また、3つ目の研究（古市ほか2017）では、《おはようクレヨン》をBGMに用いて制作を行い、共感的感覚のキーワードの視点から考察し、個人・グループの関係性によりイメージの共有が強化されていったことが示された。以上のように、古市らの研究は、音楽と造形を含む4つの教科に共通する動機づけとなる「共感的要素」を探ってはいるものの、教員養成機関における限られた学修時間のなかで表現の技術を伸ばすことを目的にしており、音についての子どもの絵から、子どもがどのようにその音をとらえたのかを考えるものではない。

2. 幼稚園での和楽器を用いた保育実践

本研究は幼児期の表現活動からつながる小学校音楽科の授業を、和楽器を用いた活動を通して考案するものである。

本章では、2018年2月に行った京都幼稚園での実践について述べる。

2. 1 実践の概要

- ・対象：京都幼稚園5歳児：つき組・ひかり組
- ・日時：2018年2月27日・28日の2回
- ・内容：絵本の内容を基に、「打つ」をテーマにして和楽器（打楽器）の音から色や形のイメージを広げる
- ・ねらい：①日本の楽器の音に触れる、②音から色・形のイメージを広げる



・教材①：絵本

活動の導入に『とんかちぼうや』（いとうひろし／作，クレヨンハウス1994）を用いた。この絵本は，トンカチぼうやがトンカチで色々なものを叩き，目を閉じて耳をすますと，音が見えるという内容である。絵本では，木を叩く音や釘を打つ音が色や形となって表されている。他にも，ガードレールや水を叩く音などが続いていく。

・教材②：使用する和楽器

保育者が鳴らす3種類の和楽器は当り鉦・太鼓・拍子木〔図1〕である。これらの楽器は，子どもたちがお祭りのお囃子などで聞いたことのある比較的イメージを広げやすいと思われるものを選んだ。



〔図1〕使用した3種類の和楽器

・和楽器の音を描くための準備

①実践日の数日前から絵本を読み，絵本の内容に親しむ，②音を描くことに慣れるために，既知の西洋の打楽器であるシンバルをマレットとスティックで打ち，響きの違いを感じて音のイメージを色や形に描く。（15cm角画用紙を一人2枚用し，一枚目にはスティックでシンバルを打った音を描き，もう一枚にはマレットでシンバルを打った音のイメージを描く）

2. 2 保育の展開と子どもたちの様子

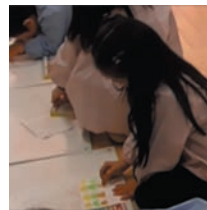
2. 2. 1 第1回（2018年2月27日）の活動の展開

（1）音を聞いて，描く

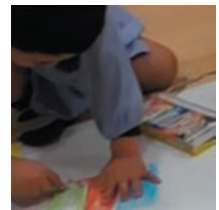
保育者は子どもたちから楽器が見えないようにして，鉦・太鼓・拍子木を打つ。子どもたちは楽器の音をよく聞き，イメージを広げてクレ



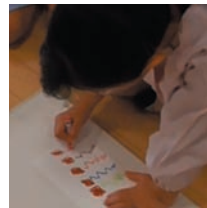
〔図2〕目を閉じて耳や顔に手を当て，音を聞く子どもたち



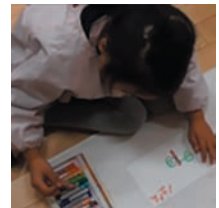
〔図3〕鉦の音を描く



〔図4〕太鼓の音を描く



〔図5〕拍子木の音を描く①



〔図6〕拍子木の音を描く②

ヨンで画用紙に描く〔図2～6〕。

（2）友達と見せ合う

子どもたちは描いたものを円になって見せ合い，友達の表現を共有する〔図7・8〕。また，叩いた楽器を明らかにして，楽器の音と描いた絵のイメージを共に味わう〔図9〕。



〔図7〕表現を共有する①



〔図8〕表現を共有する②



【図9】 保育者が音を聞かせた和楽器を提示する

2. 2. 2 活動時の子どもたちの様子

(1) 音を聞いて描く時の子どもたちの様子

実践を行った2月末は、年長クラスの子どもたちは「リズム参観」という園の行事で、練習を重ねた合奏曲を披露した後である。本実践の準備段階でシンバルの音を描いた経験をふまえて、担任教諭が「この前、音を描いてくれましたね。みんなには、『この音はこんな色、こんな形』って、感じる心がいっぱいあるんだとびっくりしました。今日は、3つの新しい音を持ってきました」と言葉をかけると、子どもたちからは「カスタネット?」「木琴?」「トライアングル?」「トーンチャイム?」などの声が次々に上がり、保育者の持ってきた「3つの新しい音」を自分の知っている楽器、経験のある楽器などの中から探ろうとする姿が見られた。

保育者が子どもたちの言葉を受けて、「どんな音やろうね。トライアングルかなあ。カスタネットかなあ。スズかなあ。目をつぶってたら、よく聞こえるかも…」と言うと、子どもたちは目を閉じて音に集中しようとする。そして、保育者が鉦を1回打つと、その響きを聞いて「おっきな音!」(男児)などの声は挙がるが、なかなか書き出せない様子である。また、「描けない…何も見えない」(女児)と言う子もあり、保育者は「何色に聞こえたかな?」など言葉をかけながら鉦を全部で3回打った。この女児は、結局、白色のクレヨンで画用紙を塗りつぶした。

次に保育者が太鼓を1回打つと、「たいこや! たいこ」「絶対たいこ!」という声がいくつも挙がり、見えない楽器の音を確認した様子

が見られた。保育者が「太鼓は太鼓でも、どんな音がするか考えてよ」と言うと、「やっぱり音は赤がいいよ」(男児)、「忍者の使った太鼓」(男児)など



【図10】 オノマトペを書く

音のイメージを口にする子どもが見られた。また、音を描くことに慣れてきたようで、鉦の時よりも描画に集中している様子であった。

3つ目の拍子木では、「なにか、ブロックがバチッとぶつかるような音」(男児)や、3つの音それぞれを聞いた後に先ずオノマトペを「かん」(当り鉦)、「とん」(太鼓)、「ばん」(拍子木)と書いてから描画を始める女児もあり[図10]、音の印象を色や形だけでなく、オノマトペで捉えている例もあることが窺えた。

(2) 友達と見せ合う時の子どもたちの様子

各自が絵を持って輪になり、互いの表現を見せ合う時の子どもたちの表情は、「嬉しい」「恥ずかしい」「見てもらいたい」などの気持ちが交じり合っているように感じられた。担任教諭が「絵の説明できる人いる?」というとき、何人もの子どもが「言える!」と手を上げる。

鉦では、「赤色の中にオレンジ色の三角が入っている」(女児)、「描けない音やった」(女児：白色で塗る)などの説明が聞かれた。

太鼓では、「ボールが跳ね返った音」(男児)、「縦の線が並んでいる」(男児)、「虹色の太鼓を叩いている」(女児)、「クジラがアメを食べている」(女児)などの説明がなされた。

拍子木では、「磁石の音」(女児)、「ドアに鍵がささった音」(女児)、「下駄で歩いている」(男児) [図11]、「木みたいな四角がいろいろぶつかっているような音」(女児) [図12]、などの説明がなされた。



【図11】 下駄で歩く音



【図12】 木の四角がぶつかる音

2. 2. 3 第2回（2018年2月28日）の活動の展開

第2回は和楽器の探索とお祭りばやしの視聴を行った。

空き教室に締め太鼓1台とその他の和楽器（拍子木、すず、鉦、チャップ、太鼓）を複数並べて、子どもたちが6～7人のグループごとに自由に楽器に親しむことのできる環境を設定した。すべての子どもたちが楽器探索を終えた後、クラスごとに祭囃子のDVD（小倉祇園太鼓『日本の祭り①太鼓』）を視聴し、祭囃子によって好きな楽器を持ち、鳴らして楽しんだ。担任教諭が「スッテン、スッテン、スッテンテン」と口唱歌を唱えながら締め太鼓を打つと、太鼓を持った子どもたちも同様に発声しながら太鼓を打った。この活動については、紙面の都合上、稿を改めて考察する。

2. 2. 4 実践者の感想 ―保育後のインタビューより

保育実践後に岡林と佐野は2クラスの担任教諭2名にインタビューを行い、振り返りを行った。以下の表1にその内容の一部をまとめた（表内のOとSは岡林と佐野）。表1の下線部（下線は筆者）より、担任教諭は子どもたちが意欲的に自分なりの表現を試みており、表現することを楽しむことができたこととらえていることが窺える（※1、※3）。また、今回の活動では、普段あまり描けない子が描けたり（※2）、反対に普段はよく絵を描く子どもが抽象的で形のないものに対して「描けない」と悩む姿に接する場面（2. 2. 2（1））もあり、普段の活動と異なる新たな気づきを得ていることが理解できる（※6）。「スッテン」という口唱歌を「トッテン」や「ドッシン」と変化させる子どもの即興性、表現力の豊かさを見逃さない保育者の視点（※5）は、これまでに執筆者らと共に培ってきた着眼点であると思われる。

2. 2. 5 子どもたちの描画について

活動における子どもたちの発言から、音を色・形に結びつける過程は3つに分類できる。

表1 担任教諭へのインタビュー内容

O	これまでの保育活動と比べて、この活動について感じられたことがあればお聞かせください
担任A	なかなか難しいんじゃないかと言ってたんですが、子どもたちが意外にスッと描いたな、とは思いましたね
S	これまでにどのような描画活動をされていましたか
担任B	自由に好きな絵を描くとか
担任A	経験したこと、夏休みや冬休みで楽しかったことなど
S	今回の活動における子どもたちの絵をご覧になって、どのように思われましたか
担任A	<u>あまり真似をする子がなくて、「私はこうだ」と自分の意見を言えたのはよかった※1</u> かと思います。年長になると「正解は？」というか、上手下手などを気にして、大人の思惑を探るようになってきますね
S	先生方は、活動における子どもたちの姿をどのように思われましたでしょうか
担任A	<u>いつもはあまり描けない子が描けたりなど、普段と違う姿があったな※2</u> と思います
担任B	<u>想像していたより皆が積極的に楽しんでいました※3</u>
O	既知の西洋楽器とは違う和楽器に対する子どもたちの様子で、印象に残れたことがおありでしょうか
担任A	和楽器はやったことのない楽器だったので、1回目後には「やりたかった」と言っていました
担任B	想像していた太鼓と違っていたので、「あれー」という感じでした。小太鼓には馴染みがあるのですが
O	日本の楽器を触ったり、お祭りのお囃子を聴いたりしましたが、子どもたちが日本の音楽に興味を持ったと感じることはありましたか
担任A	<u>DVDの映像を食い入るように見ていた※4</u> ので、こんなに楽しめるんだなと思いました
	「スッテン」というのは面白い響きだととらえています。楽しいリズムを表現

担任B	することができていました。 「トッテン」という言葉に変えたり、 「ドッシン」と足を出したり※5、笑顔で 生き生きとしていました
担任A 担任B	いつもの活動と違って新鮮でした。自由 に鳴らせて、私たちも楽しかったし、 子どもも気分が乗っていました
S	新鮮だと言って頂きましたが、普段とは 違って積極的だった子はいましたか
担任A	自ら表現したい子が多くいることや、 この子にはこういう面があるのだとい うことが新たにわかりました※6

- ① 音を「共感覚」的に色・形として捉え、表現する。
- ② 音をオノマトベに置き換えてから、造形的に表現する。
- ③ 音を具体的な動きのある場面や行為と結び付けて表現する。

次に明瞭な表現と認められた5人の描画を抽出し観察した(図13)。まず、5人とも複数の形を併置することで音の時間的連続性を表そうとしている。また、A・B・C児は色より形を重視して音のイメージを描き分けている。対し



[図13] 5人の子どもたちの描画

て、D・E児は形よりも、むしろ色を重視して音を描き分けていることが認められた。

一方で、音ごとに描画を観察すると、鉦の音の描画に黄色等の明色が、太鼓の音の描画に黒・青等の暗色が使われる傾向が少し認められるものの、明確な共通点は認められなかった。

以上のことから、音を色・形に結びつける過程の違い、表現の際に重視する色・形という造形要素の違いが表現の多様性となり、独自の表現に結びついた。また、音ごとの表現に共通点が少ないことから、他者の影響を受けず、自らの感性と表現方法で音を描き分けていたと考えられる。よって、この実践が音楽・造形に共通し核となる感性の育成につながると期待できる。

3. 小学校での和楽器を用いた授業実践

3. 1 実践の概要

京都幼稚園での実践に続き、2018年3月1日、2日に、筆者らは京都女子大学附属小学校1年生2クラスを対象にして授業を行った。授業内容は2クラスとも同じである。実践に関わる詳細な内容と計画については岡林・坂井・佐野が話し合いをもち、授業実践者の山崎と岡林が綿密な打ち合わせを行った。観察・記録は、岡林・坂井・佐野が行った。(表2, 3は佐野が作成した)

今回の一連の授業実践については、表1のように題材設定をした。また、全2時間の指導計画は、表2の通りである。

3. 2 第1時の実践の様子

第1時の導入として、幼稚園でも視聴した祭囃子のDVD(《小倉祇園太鼓》『日本の祭り①太鼓』)を10分程度視聴した。これを教材とした理由は、祭囃子がリズムカルに奏でられていること、太鼓、鉦、チャップなどを用いるシーンや、小学校低学年児童の練習シーンが出てくることなどである。視聴後に教師が「太鼓はどんな音がしていましたか?」と尋ねると、子どもたちは「コンコ、コンコ」「ココン、ココン」「パンパ、パンパ」などと答え、その他にも「チャッ、チャッ」などの音があったことを指

表2 題材の設定

題材名	「お祭りのお囃子を聞いて、和楽器の音とリズムを楽しもう!」
題材の目標	(1) お囃子を聞いて、リズムを口唱歌で表現しながら演奏を楽しむ (2) 日本語をリズムに置き換えて、音楽をつくる (3) グループで協働しながら発表に取り組む
題材について	
<p>本題材は、主として小学校学習指導要領A表現(3)「音楽づくりの活動」イ(ア)「声や身の回りの様々な音の特徴」に気付き、ウ(ア)「設定した条件に基づいて、即興的に音を選んだりつなげたりして表現する技能」を身に付けることに関連している。</p> <p>これまで子どもたちはタンバリン、カスタネット、トライアングルなどの打楽器を演奏してきた。日本の打楽器を実際に鳴らしてみることによって音の特徴を知り、お囃子の持つ日本のリズムに親しむことができる。次にグループで言葉をつなげることにより、拍の流れにのって表現する感覚を養う。さらに口唱歌から言葉を唱える活動につなげることにより、日本語の語感を大切にしたりリズムをつくって楽しんで欲しい。</p>	

表3 指導計画(全2時間)

時	○ねらい ・主な活動
第1時	<p>○和楽器の音色に触れ、お囃子のリズムに親しむ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お祭りに用いられる楽器の音を探索する: 教師が太鼓、拍子木、鉦、すずの順で提示する ・口唱歌の練習をする: グループでひと通り口唱歌を練習する。 ・口唱歌に合わせて楽器を鳴らす 太鼓: スッテン スッテン スッテンテン 拍子木: カン カン カカ ヤ 鉦: チチ チチ チチ チチ ・グループごとに3種類の楽器を持ち、口唱歌とともに鳴らす ・5つのグループから一人ずつ楽器をもった代表が楽器を鳴らして、音を合わせる
第2時	<p>○グループで協働しながら、自分たちのリズムをつくって発表する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・好きな食べ物をつなげて、日本語のフレーズを作る(らーめん→ドーナツ→アイスクリームなど) ・グループで発表する ・日本語のフレーズを楽器に置き換えて演奏する

摘していた。

教師が太鼓を紹介し、弾んだりリズムを刻むと、子どもたちはリズムにのって笑顔で体を動かしていた〔図14〕。



〔図14〕 太鼓のリズムにのって体を動かす

また、教師が拍子木を提示すると、子どもたちは「ひの・よう・じん」や「ひの・よー・う・じん」などと陽気な声をあげた。次に鉦の奏法を示しながら弾んで打つと、皆が椅子に座ったまま両手両足を上げて踊る仕草を見せた。

口唱歌の練習では、太鼓の「スッテン スッテン スッテンテン」を繰り返し唱えながら自然に体が揺れたり、手拍子を入れたりしていた。また、「スッテン スッテン スッテンコロリン」などと言葉の入れ替えも見られた。拍子木では「カン カン カカ ヤ」の「ヤ」で勢いよく腕を上げる動作が自然につけられた〔図15〕。



〔図15〕 拍子木の口唱歌の「ヤ」で腕を上げる

6人ずつのグループに太鼓、拍子木、鉦が配られ、口唱歌を唱えながら練習した後、太鼓や拍子木担当の班が決められた。グループ活動はそれぞれが積極的に関わり、スムーズに進んだ。

3. 3 第2時の実践の様子

第2時では、好きな食べ物をつなげて日本語のフレーズを作ることを試みた。教師が数人を

ピックアップして要領を説明したが、初めは子どもたちが挙げた「ハンバーグ」「さば」「ハヤシライス」「いちご」「うめぼし」などの言葉がうまくつながらず、途切れてしまった。教師が太鼓を打ってリズムの流れを感じさせたり、手を打つように指示を出したりして工夫をした結果、次第につながるようになった。

グループ活動においては、複数の子どもが同じ目的を共有して協力し合う協働学習の姿が認められた。そして、それぞれのグループが工夫しながら練習を重ねた後、発表が行われた。どのグループも6人が順番に自分の好きな食べ物をリズムよくつなげていた。以下に一例を挙げる。

児童A「ハン・バー・グ・●」→全員で「ハンバーグ」→児童B「てっ・かま・き・●」→全員「てっかまき」→児童C「ハヤシ・ライ・ス・●」→全員「ハヤシライス」→「ラ・イ・チ・●」→「ライチ」→「たま・ごや・き・●」→「たまごやき」→「お・わ・り・●」



〔図16〕 グループで発表を行う

発表後には、日本語のフレーズを楽器に置き換えて表現した。

3. 4 実践者による振り返り

実践者である山崎は今回の全2時間の活動を振り返り、以下に気づいたことをまとめた。

① 和の音に対する子どもの反応

4月からを振り返ると、和楽器に触れたことは初めてで、教師が楽器紹介で楽器を持ったときから多くの子どもが注目し、よく聴こうとす

る態度が見られた。音を鳴らすと多くの子どもが嬉しそうな表情になり、高い意欲をもって授業をスタートできた。

② いつもの子どもたちとの違い

普段は数名の児童がクラスの輪の中に入らずに違うことをしたりする傾向があるが、今回の実践は全員が興味をもって参加していた。またこの2時間はグループ活動が多かったが、楽器を使ったり好きな食べ物でリズムまわしをして、スムーズに楽しく取り組めた。1年生なので教師に決められたとおりのことしかできない様子だったが、自分たちの発想を取り入れて工夫した発表も見られたので評価できるだろう。

またグループ活動と全体活動のメリハリがつけられたことは、1年生3学期のこの時期だからこそだと思う。

③ リズムことばについて

リズムにことばをつけることで、子どもたちも授業に取り組みやすくなり、楽器を見せるだけでリズムことばを唱える子どもも見られた。「スッテン」などの言葉を使うことで、好きな食べ物のリズムづくりにスムーズに入っていくことができた。しかし、言葉の中に短い音や延ばす音が入っていないと、2拍や3拍などの単調なリズムの繰り返しになってしまい、リズムのおもしろさを感じられない場面もあった。

④ 1年生にとって授業内容の難しさ

今回の授業をする前には、グループで言葉を考えて回す「リズムまわし」が難しくて途切れてしまうのではないかと考えていたが、比較的すんなりとできた。以前の経験が活かされて、取り組みやすかったのではないと思う。

⑤ 今後の展開の可能性

今回使用した和楽器に和太鼓やリコーダー（笛がわり）などを含めて、グループでのお祭りの音楽づくりに発展できそうに思う。1年生には難しいかもしれないが、以前に4年生で行ったものがより深い学習になるかもしれない。

⑥ その他

2組では好きな食べ物のところで、面白いリズムになる言葉がたくさんできたので、クラス全員でのリズムまわしも楽しい音楽となった。

しかし、言葉を使うことで精一杯になり、手に持った楽器を鳴らすことができていない子どもも見られた。何度か繰り返すとできるのかもしれないが、時間的に厳しかった。音楽づくりは様々なことを教師が強制するものではないので、もっと子どもの積極的な姿を出せればよかった。普段から「音楽づくりの楽しさ」を子どもたちに染みこませておく必要があると考える機会となった。

4. 考察

4. 1 子どもたちのオノマトペ表現やリズムカルな音声表現にみる特徴

幼稚園での音を聴いて絵を描く活動では、絵にオノマトペが書き入れられていた。5歳の子どもにとって和楽器の音はオノマトペとしても、絵としても同様な総合的感覚として示されたものであろう。音を聴いて聞こえた通り声に出したり書いたりできることは、感性の自由な表現として大切にすべきことであろう。

オノマトペには一般化され固定的なものもあるが、子どもの発するオノマトペには聞こえた通りに声として表現する音象徴性が多く見られる。これらの感性や、一方向の表現でない総合的な表現、イメージを豊かにする・広げることなどが、子どもたちの素地として取り上げられるべきであることがわかる。

「スッテンスッテン…」という口唱歌を子どもがさっそくアレンジして、「トッテン」など即興で声を出したり、「ドッシン」と言いながら足を出すなどの場面があり、子どもたちののびやかな音声表現や身体表現が担任教諭の気づきの中にあった。これまでの筆者らの継続的な実践により子どもも先生も豊かさや自由さを発揮したり認めたりする素地ができていることを感じさせられた。

また、今回は好きな食べ物をリズムに乗せてつなげることを試みた。言葉を拍にあてはめる、いわゆる「配字」は言葉に対する感覚をみがくことのひとつになる。その際には、特殊拍（長音、撥音、促音、2連母音後部要素）が縮小されやすく、そうした日本語の発音上の特徴はわらべ

うたの特徴と同様であることから、音声表現の基礎として子どもたちにとって重要な実践であったと言える。

4. 2 幼児期の協同性から協働的な学習へ

幼稚園での実践では、描画時に個々の子どもが和楽器の音に耳を傾けて感じ取ったイメージを描き、それを互いに見合うことで他者の表現を共有したり、共感することができていた。また、その後に行った楽器探索では、子どもたちがこれまでに触れたことのない楽器を目の前にして、興味・関心を抱く様子が見てとれた。初めはそれぞれに自分の鳴らしたい楽器や撥を手にとって鳴らしていたが、次第に友達とタイミングを合わせて鉦と太鼓を鳴らし合ったり、締め太鼓の撥を二人で一本ずつ持ち、顔を見合わせながら打つ姿が見られた。楽器の取り合いをすることもなく友達の鳴らす鉦の音と自分の太鼓の音を合わせることができ、自由な空間の中で互いに響き合い協同し合う姿が捉えられた。

一方、小学1年生の実践では、子どもたちはまずは「スッテンスッテン」や「カンカン カカヤ」などの口唱歌のリズムを感じて声を合わせることや、共に体を動かすことを楽しんでいた。また、好きな食べ物をリズムにのせてつなげる試みでは、それぞれのグループがどうすればスムーズにつながるか、またどのような言葉を用いるとリズムの楽しさが生まれるかなどの工夫をしながら練習を重ね、発表が行われた。

グループ活動では複数の子どもが同じ目的を共有して協力し合う協働学習の姿が認められた。音楽はそもそも協同的、集団的な性格を有しているが、本実践からは、幼児期の表現活動の中で芽生えた協同性が、子ども同士の人間関係の構築とも関わりながら、続く小学校1・2年生の音楽科の授業へとつながり、成長に伴って表現が深まることや創造性が広がることが示唆された。

4. 3 音遊びから音楽づくりへの可能性

幼稚園の実践では、子どもたちそれぞれが自分なりの表現で、音を絵に表わすことに取り組

んでいた姿が印象的であった。色によって表現するか、形によって表現するかの違いが見られたものの、それぞれの絵からは、子どもたちが音の違いを感じ取っていたことが窺える。音の違いに気付くとともに、そもそも自分なりの感覚や考えをもとに表現することがその後の音楽的活動においてもっとも重要な「核」となるものであり、正解を求めないこのような活動の積み重ねこそが重要であろう。

小学校では、口唱歌を唱えて和楽器のお囃子を演奏することから始め、自分たちで考えた言葉をつなげて、日本語の語感を大切にしたりリズムをつくった。最初はリズムにのれない子どもも、指導教諭の叩く太鼓の音に導かれて、次第にスムーズにつなげるようになっていった。何よりも、教師に決められたとおりのことしかできない子どもたちが、今回は自分たちの発想を取り入れて言葉のリズムを工夫し、楽しんでリズムをつくっていた。

今回は幼稚園、小学校のどちらにおいても、子どもたちがあまり触れたことのない和楽器を使用したことが、子どもたちの意欲を高めたといえるだろう。触れたことがなくても、実はお祭りで聴いたことのある子どもも多いわけで、普段あまり活動に参加しない子どもたちも身近にあるお囃子のリズムにのって表現し、積極的に楽しんでいたと思われる。

このように、今回のお囃子を教材にして、和楽器の音の特徴を知ることから音楽づくりへとつなげた試みは、身の回りに存在している音や音楽の再発見という意味も持つと考えられる。

おわりに

本研究では、領域「表現」からつながる小学校音楽科の授業を、和楽器を用いる活動によって試みた。今後も一つひとつの実践事例を丁寧に分析し、大学教育と幼稚園、小学校教育の双方の質の向上を図ることを目的として幼小接続の研究に取り組んでいきたい。

謝辞

本研究に当たり、京都幼稚園年長クラスご担

任の松田幸恵先生、吉岡愛先生、園児の皆さん、
附属小学校の児童の皆さんにご協力を頂きました。
深くお礼を申し上げます。

執筆の分担は、[1][4.3]表1, 2の作成(佐野), [はじめに][4.1](坂井), [2.2.5](辻), [3.4](山崎), それ以外の部分を岡林が執筆し、幼稚園の実践の総括を深澤が行い、全体構成は坂井と岡林で行った。

引用・参考文献

- 岡林典子・ガハプカ奈美・山野てるひ「感性を育む表現教育のプログラム開発—『楽曲を描く』課題を中心に—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第8号, 2012, 139-148
- 岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・深澤素子・難波正明「幼小をつなぐ音楽活動の可能性—京都幼稚園と京都女子大学附属小学校1年生の実践をふまえて—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第10号, 2014, 77-86
- 岡林典子・難波正明・佐野仁美・坂井康子・南夏世, 「幼小の子どもへの育ちをつなぐ音楽活動の試み—遊び歌《しゅりけんにんじゃ》の実践をもとに—」, 『関西楽理研究』XXXⅡ, 2015, 41-52
- 岡林典子・難波正明・深澤素子・砂崎美由紀・山崎菜央・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(3)—幼稚園・小学校での実践を教員養成に活かすために—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第12号, 2016, 89-98
- 岡林典子・難波正明・山崎菜央・深澤素子・松田幸恵・藤井香菜子・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(4)—絵本を用いた『表現遊び』から『音楽づくり』へ—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第13号, 2017, 73-83
- 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・難波正明・南夏世・山崎菜央・深澤素子「領域『表現』と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性—『マカスカ作り』によるオノマトペ表現と協同性の成り立ちに注目して—」『京都女子大学発達

教育学部紀要』第14号(1), 2018, 115-124

- 佐野仁美・岡林典子・坂井康子「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び—絵本を用いた実践をもとに—」『関西楽理研究 XXXⅢ, 2016, 15-31
- 難波正明・岡林典子・深澤素子・砂崎美由紀・山崎菜央・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(2)—わらべうた《らかんさん》の実践から」『京都女子大学発達教育学部紀要』第11号, 2015, 11-20
- 古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的要素を使った教授法Ⅰ—保育実践教科書进行分析する—」『東邦学誌』第44巻第2号, 2015, 91-110
- 古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的感覚を使った教授法Ⅱ—授業実践を通して—」『東邦学誌』第45巻第2号, 2016, 37-56
- 古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感覚的感覚を使った教授法Ⅲ—造形表現の授業の分析を通して—」『東邦学誌』第46巻第1号, 2017, 57-80
- 山野てるひ・岡林典子・ガハプカ奈美「音楽と造形の総合的な表現教育の展開—保育内容指導法(表現)の授業における『音環境を描く』試みから—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第6号, 2010, 47-59
- 山野てるひ・岡林典子・水戸部修治編者『幼・保・小で役立つ 絵本から広がる表現教育のアイデア』一藝社, 2018
- ※本研究はJSPS(課題番号17K04889代表者:岡林典子「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発」/課題番号16K04719代表者:佐野仁美「教員養成課程における音楽の創造力を高める教授法の開発」/課題番号17K04655代表者:坂井康子「『声・ことば・うた』の音響的・韻律的分析に基づく保育・教育の表現活動の研究」)の助成を受けている。

